
キミの笑顔と冬の星空

りす君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミの笑顔と冬の星空

【Nコード】

N2197B

【作者名】

りす君

【あらすじ】

主人公の真っ直ぐな気持ちを書いた恋愛小説です。

(前書き)

これは主人公の淡い恋の話…

…普通の人間なら誰しも、人生の中で一度は一人の異性に対して恋愛感情を持つ時期が訪れるだろう。僕にも今、その時期が訪れている…。

君は毎朝笑顔で学校に来て、誰に対しても礼儀正しく挨拶をする。その屈託の無い澄みきった君の笑顔を見るために僕は、毎日学校に通っているのだといつの間にか思っていた…。

あっ…また君が笑った…。

僕は彼女と同じクラスになってから今まで一度も自分から彼女に話しかけた事は無い…。話しかける機会は一杯あるのだが…今一歩踏み出せない状態が続いていた。全く…僕ってダメな奴だ！

僕がうつ向いて考えていた時、不意に隣の席の森下から

「おい、浦瀬。誰かお前の事を呼んでるぜ。」

と話しかけられたので顔を上げてみたら…、君が向こうで待っていた。君の手には見覚えのあるミニタオルが…

ああ…、あれは僕のだ。落ちてたのを拾ってくれたのか…、やっぱり優しいなと思いつつ君の元へ駆け寄った。

…やや小さめな細い身体に整った輪郭、粒羅つぶらな瞳に肩下あたりまでのセミロングの髪…、そして癒し効果のありそうな小さくて綺麗な声。それでいていつも謙虚な姿勢で誰に対しても優しい君…：…新あ城恵那は僕にとっての憧れの存在で尊敬する人だったと同時に、君は僕から見て遠い存在だった…。

君からミニタオルを受け取った時、偶然にもお互いの手と手が触れ

合ってしまった。

「あつ…」

「ご、ゴメンっ！」

と言い放ち、僕はその場から逃げてしまった…なんて馬鹿な臆病者なんだろうか…。

自分の席に戻ってから今日の授業が終わるまでの事は、頭の中が真っ白になっていたのでよく覚えていなかった…。

気がついたら、通常の下校時刻を過ぎ、夕暮れの時間になっていた。僕は急いで荷物をまとめ、教室を出た。

季節は、秋から冬になろうとしていた。まだ夕刻なのに、空は群青色に染まっていた。僕は何を思ったのか自分でも解らないが、普段通らない小さな公園に来ていた。

夕暮れ時で、もう人はいないよな…と思って周りを見渡していると、向こうのベンチに一人でぼつんと君が座っていた。

最初はここにいる事に驚いたが、気持ちを落ち着かせ、僕は思い切つて君に話しかけてみた。

「そ、外は結構寒いのにこんな所でどうしたの？」

君は、顔を上げて僕に気づくと少し驚いた顔をして、

「えっ…、うん…ちょっとね。」

と言った。

君を見てみると、凍えていたので僕は素早く来てた学校指定のブレザーを掛けてあげた。

「ありがとう！」

と、君が言ったので僕は何と答えていいか解らず、ただ

「いえいえ…。」

と言つのが精一杯だった…。

そこから会話が途切れとうとう、お互い沈黙してしまった。

冷たい風が公園の木の枝を揺らし、音を立てながら僕の頬を撫でて吹き抜けてゆく…僕はどうしていいのか解らず静寂の中、ただ冬空を眺めていた…。

周りが更に暗くなり公園内にある外灯に灯りがともった頃、君がゆつくりと口を開いた。

「私…、今まで考えてきて、やっと私の心の中のホントの気持ちが解ったの。私、前から浦瀬君の事が好きだったんだって…。」

…えっ…

「もし浦瀬君が良いなら私と…、私と付き合ってください!」

…たった今、時間が止まったように…僕は思った。…実は、君も僕の事を思っていたなんて…。僕は思い切って…、

「僕も前から、新城さんの事が好きだったんだ…宜しく願いします!」

と、やっと偽りの無い本当の気持ちが言えた。

君は頬を赤らめて、下を向いてしまった。僕の方も、気持ちが動転して心臓が激しく鼓動した。

もう二人の間にこれ以上の言葉は必要無かった。そしてお互いに見つめ合い、ゆつくりとキスをした…

そしてしばらく経ってから僕は、

「帰ろうか。」

と言ったら君は顔を上げて、

「うん」

と言って小さく笑って立ち上がった。

帰り道、僕と君は空を見上げた。

僕の目には数えきれないほどの綺麗な星空が映った、多分君の目にも…。

星空は僕らをまるで祝福しているかのように…美しく、光り輝いていた。

僕らはその美しい夜空を眺めながら帰り道をお互い、自然に手と手を繋ぎながら歩いて帰っていった…。

(後書き)

正直、恋愛小説は苦手なジャンルでした…。

この作品をお読みになられましたら是非、評価の程、宜しくお願
い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2197b/>

キミの笑顔と冬の星空

2011年1月6日14時34分発行